

六、マルク切り上げの教訓

先日行なわれたマルクの切り上げ幅は、一般の予想よりは、やや高目であった。ブランド新政権の初仕事であるだけに、少々背伸びした印象がないでもなかった。しかし、これと同時に、昨年末以来の国境税調整措置が廃止されたし、農産物の価格調整のための支持措置が約束されることになった。それだけでなく、ドイツの強い機械類等のマルク建て受注残をここ数カ月分残しているのも、今回の措置はそれ程背伸びした措置であるとはいわれまい。

勿論、英・仏両国は、マルクの切り上げを双手を挙げて歓迎した。米国にとつても、それはかねてから期待していたことであつた。しかし周辺のベルギー、オランダ、スイス、オーストリアなどは、少々不愉快な反応ぶりであつた。といつて直ちに、マルクに追隨するだけの勇氣を持ち合わせなかつた。それらの国々はいかにも対独依存度の高い経済であるだけに、これからの経済の運営には随分と骨が折れることが予想される。しかし当面の政局やツーリズム（観光）の減退

などを考えると、暫くは、このままの平価での厳しい対応を続けざるを得ないと考えたもののようだ。

それにしても、世界における通貨上の不安と思惑の一大因子がこの措置により除去された。今後相当の期間にわたって、マルクは新平価による固定相場制が堅持されることになった。このことは、世界経済にとって大きなプラスであったといえよう。尤もドイツにとっては、国内の輸出インフレに連なる根強い物価と賃金の騰勢を押える必要性の方が大きかったに違いない。それにして、私は、ドイツの勇断とそれを支えた自信に敬意を表したい。

ヨーロッパを東から西に歩いてみて、私は、ドイツの顕在的な力が増したことと、その潜在的な力の強さをひしひしと感じた。東欧を含めてヨーロッパ経済の対独依存は、益々強化されつつある。チェコ事件なども、このドイツの台頭と無関係であるとはいえない。

シラー経済相は、もともとケインジアンだといわれている。彼は引続き新政権における花形的地位を確保して、内外にわたって、経済の自由化を大胆に進めつつある。しかし彼は、同時に弱体産業の組織化を図ると共に、労働と経営と政府の三者協調路線を手堅く固めることに成功しつつあるようだ。

ブランドト新首班は、東独の存在を否定する方向ではなく、むしろ東独の現状をある程度肯定し

ようとする方向に向いつつあるようだ。そしてみずからの政權の樹立と同時に、ドイツ問題省をドイツ国内關係省に改組した。

一方、東独自体は、コメコン圏の優等生としその実績を上げつつある。しかも、東独人と西独人との間には、他の分裂国家に見られるような烈しい憎しみは見られない。ドイツ民族は、經濟の面でも外交の面でも、静かではあるが、東西の谷間において着実にその地歩を固めつつある。

他方、英国にとっては、かつての國際政治における栄光の座を保ち続けることは、最早容易ではあるまい。しかしこの国は、經濟的には依然しぶとい力を持ち続けているばかりか、戰略産業の育成を通して、新しい産業国家ないしは貿易國家として、世界史に再登場しようとする強い姿勢を整えつつある。國際收支も漸く回復の兆を見せてきた。

去年の五月以来動揺を続けてきたのは、フランスである。対米、対ソ、対独の關係において、西欧陣営における指導的發言權を誇示したドゴール時代に比して、今のフランスはいささか後退を感じさせるものがある。また、國際收支をはじめ、物価や賃金の面で、依然困難な問題を抱えて苦吟してゐる。しかし、フランスの國民、少なくともエリート達の間には、新しい情勢にフランスがその対応力を強めなければならないという意欲とあせりがありありと見られるようになってきている。英・仏のこうした動きは、何れもドイツの風圧の強まりと無關係ではないようだ。

日本は確かに今回のマルク切り上げによって若干の利点をかち得たに違いない。しかし、それは本来、日本の強い肥料、繊維、弱電等の分野において見られるのであつて、元来ドイツの強い機械類や化学品等の分野では、結局、高く買わされる結果になる可能性も否定できないのではないかと思われる。

日本の経済は表面、派手な躍進を遂げているが、内科的診断をすればバランスがとれて強固であるとは、到底いえそうもない。自己技術の水準は依然として低い。金融力や組織力も強くはない。労働と経営との間の信頼感も未だしの感が深い。しかるに、外からの風当たりは日増しに厳しさを加えつつある。それは、われわれの想像を超えたものとなりつつあり、一部では黄禍論まで飛び出してくる始末である。マルクの切り上げ後は、更にこの風潮が高まりこそすれ減退することは考えられない。

かくして日本丸は、真の意味において、国際化時代の海に険しい航海を始めるに至つたという感じがよいよ深い。